

真宗に於ける懺悔考

福井 静志

かつて著名な哲学者、田辺元氏はその著『懺悔道としての哲学』の中で、親鸞と懺悔の深い関わりを指摘されたが、ここで私は真宗に於ける懺悔の意味について少しく考察してみたいと思う。

まず親鸞の著作を通覧して気付かれることは、懺悔という言葉が彼自身の言葉として使われた用例が見出せないことである。ただ経論の引用文の中で見られるか、その解説としてのみ語られている。すなわち本典化巻（引用文三個所）、『尊号真像銘文』（引文と解説）、『高僧和讃』（礼讃の文意）等に認められる。しかも本典に限つてみるならば、その用例はいずれも要門、真門といった方便門を説く化身土の巻にだけあるということ、これは大いに注意すべき点である。

元来懺悔は「諸悪莫作、衆善奉行」という廢惡修善をその立場としていた作法である。律藏に於ける *apatidesana*（学処に違犯したことを告白すること）、大乘に於ける *pāpa-desana*（十惡業等の罪惡を告白すること）、いずれも真宗の教学の中では十九願要門に摂められる作法である。それは如何に深刻な懺悔であつても、罪福心に動かされる限り、不了仏智の行として斥けられねばならない。仏教通途の懺悔は、真宗に於てはまず捨てられるべき要門の立場であることを銘記すべきである。親鸞が懺悔という言葉を化身土の巻

にのみ引用する意図が自ずから領解される。

ところで本典には「悲哉」として二個所（信巻、化巻）に親鸞自身の至らなさが嘆かれている。また悲嘆述懐和讃には親鸞の心の姿が傷ましいばかりに告白されている。田辺氏はこうした面を深刻な懺悔と受取られたようである。しかしこれは所謂仏教一般の懺悔とは質的に異なるものである。そこには仏教の、殊に大乘の懺悔法一般に見られる現世的要求や、来世的願求は微塵もない。しかも最も大事なことは、その悲嘆はすでに弥陀の摂取の光益にあずかつた法の慶びに反照されたものであるという点である。総序と後序の文の二個所に見られる「慶哉」を措いて「悲哉」を語ることが出来る。信機、信法二種の心相をそこに窺うことが出来る。

徒らに深刻な懺悔をすることは、親鸞の本意ではなかつた。この点に関して『唯信鈔文意』に親鸞は次のように述べている。

廻心といふは自力の心をひるがへし、すつるをいふなり、（中略）自力のころをすつといふは、やうやうさまさまの大小の聖人、善惡の凡夫のみづからが身をよしとおもふころをすて、身をたのまず、あしきころをさかしくかえりみず、云々（傍点筆者）と語っている。ここには明らかに親鸞が深刻な賢しき懺悔を自力のものと嫌つていた消息が読みとれる。そして「みづからが身をよしとおもう」信福の心と、「あしきころをさかしくかえりみる」信罪の心を捨てんがために説かれたのが二種深信である。

空華三師の一人、柔遠の『本典頂戴録』には「選択集」から「今建二立二種信心、決一定九品往生者也」を引用し、解して云く、信機の釈を以て上六品の信福の機を亡泯し（此に定善を摂す）信法の釈を以て下三品の信罪の計を亡泯し、能く他力

の正信を獲得せしむ、故に九品往生を決定すと云う¹⁾

と述べてある。信機は、信福に誇る上六品の計をたたき落し、信法は信罪に沈む下三品の人を引き上げると説かれるのである。

ここに信罪福と二種深信が相對峙するものであることが納得される。前者は自力の心であり、後者はそれを打破る他力の信である。

もし信機が信法をはなれて信罪と墮すならば、それは信機自力の深刻な懺悔となる。この信罪の執心を對治せんがために法の深信が建立されてあることを忘れてはならない。

畢竟、魔惡修善の立場でされる深刻な自力の懺悔が一般の懺悔であるとするならば、そうした信罪福の心持をひるがえて弥陀の願海に帰入するところに弘願門の立場がある。そしてこの信の一念に、法の徳として自ずと三品の懺悔の徳を具すると言うのが浄土真宗である。

さて親鸞とは對照的に懺悔という言葉が積極的に使うのが蓮如である。その場合しばしば、廻心とか改悔という言葉と熟して廻心懺悔、改悔懺悔としている。五帖八十通の御文章の中に廻心懺悔が四回、改悔懺悔が三回、懺悔が単独で二回、帖外をいれると都合十七回に亘つて懺悔という言葉が顔を見せる。

しかしこの場合の懺悔は概ね仏教通途の懺悔ではない。蓮如が廻心や改悔と共に懺悔を語る意図はそこにある。

たとえば一帖目二通に「つみは十惡五逆謗法闡提のともがらなれども、廻心懺悔して」とある処を、三帖目五通では「一生造惡のものも、ただ我身のつみのふかきには目をかけずして」と置き換えられている。後続の文が他力の信心を勧める同一のものであるだけに、この置き換えは注意されねばならない。これは丁度、親鸞の

『唯信鈔文意』にあつた「廻心といふは……あしきころをさしかくかえりみず」の文を想起させる。

道隱は『御文明燈鈔』に

我身の罪の深きにも心をかけずとは、信罪福を遮す、若し我身のよしあしに心かけけるは即ち仏智を疑ふなり²⁾

と註釈している。

蓮如が廻心懺悔といい、改悔懺悔と言う時、それは決して信罪福の立場で言うのではない。むしろそうした自力の執心をふりすてて、仏願の深きことわりを仰ぐことを意味する。廻心も改悔も、そして懺悔も本願の正意に帰入する信心にほかならない。蓮如の説く廻心懺悔は即ち二種深信であるといわれる所以である。

以上、真宗に於ける懺悔を親鸞と蓮如の場合について考察してきたが、要するに仏教通途の懺悔とは魔惡修善であり、その魔惡修善の心持までも改めるのが浄土門の廻心であり改悔であり、そして懺悔である。それは善惡共に廻心する故に不共の改悔といわれ、無二の懺悔と言われる。従つて真宗の懺悔とは、伏してわが心の罪惡感を深めることではなくして、善もいらず、惡も恐れなしという仏願の深意をひたすら仰信することであると見えよう。

(1) 『竜谷教学』第十四号所収拙論「仏教に於ける懺悔滅罪の一考察」参照。

(2) 真聖全二一六二八。

(3) 真叢七一五二。

(4) 真叢十一一五七、一五八。

(5) 真叢十一一五六。

(6) 充賢『改悔文聞書』、前掲拙論参照。

(7) 真聖全三一四八八。

(寺院住職)